

家事調停におけるナラティブ・アプローチ

Narrative Mediation — An Approach to Conflict Resolution

関 井 友 子*

Tomoko SEKII

要旨：ナラティブ・アプローチとよばれる視点や実践に着目し、家事調停での実践応用への前提となる観点整理を行う。近代社会の基本パラダイムから離れて、新たな認識論に基づく紛争や対立の調整のありかたを目指す。現在の調停で主流となっている理論つまり問題解決アプローチは、人びとの内的な欲求や利害から生じたものであるという仮説に基づくものである。一方、ここでは、調停におけるナラティブ・アプローチを人々がある対立関係の中で自分自身を見つめている視点を変化させるようなものとして位置付ける。言語が果たす役割に着目し、対立ではなく、理解、敬意、共同の物語を基盤とする人間関係の発展を目指すものとして捉える。また、物語がどのような現実をつくりあげていることに機能しているかを重要視する。

キーワード：ナラティブ・アプローチ，社会構成主義，家事調停

はじめに

本稿はナラティブ・アプローチあるいはナラティブ・プラクティスとよばれる視点や実践に着目し、家事調停での実践応用への前提となる観点整理の試みである。社会（モダンシステム）の基本パラダイムから離れて、新たな認識論に基づく紛争や対立の調整のありかたを目指すものである。

ナラティブ・プラクティスの実践例

ナラティブ・アプローチはこれまで対人援助の方法としてセラピーの領域での試みが主に紹介されてきている。例えば、オーストラリアのマイケル・ホワイト（Michael White）とニュージーランドのデイビット・エプストン（David Epston）によって提唱された、ドミナント・ストーリー（支配的な物語、こだわっている物語）からオータナティブ・ストーリー（もう一つの

* せきい ともこ 文教大学人間科学部

物語)への書き換え、外在化という取り組み。ハロルド・グーリシャン (Harold Goolishian) らが行った「無知の姿勢」による支援者とクライアントによるコラボレイティブ (協働) による、あらかじめ定められたゴールではなく、対話の中で新たなゴールを探っていくという立ち位置。トム・アンデルセン (Tom Andersen) によって提唱された、家族療法における援助者とクライアントの位置 (マジック・ミラー) を反転させ、観察者と被観察者の関係を入れ替えることによって、双方がより対等な関係を構築させ、クライアントだけでなく援助者も自分自身を客観的に見つめなおす、リフレクティングという技法。

また、アルコール依存症や薬物依存症、摂食障害などのアディクションへの有効な対処方法としての、自助グループでのミーティングの取り組みも、ナラティブ・プラクティスとして解釈されている。

統合失調症などの精神疾患への対処から生まれた、我が国北海道の「浦河べてるの家」の当事者研究。精神疾患はその病名において治療者が診断を下すものであるが、べてるの家では統合失調症の当事者が自らの病名をつけ、その病状を研究するというアプローチを行う。そのなかで自分の症状を「幻聴さん」と名付け、その対処法をべてるのメンバーと共に探っていくという、ユニークな試みを行っている。さらに、べてるの家の取り組みと共通点も多い、フィンランド西ラップランド地方の「オープン・ダイアログ」という精神疾患への対処法は、専門家チームが通報から 24 時間以内に患者の家に外向き、症状が改善されるまで当事者やその関係者と話し合いを持つというもので、精神疾患が慢性化してしまう前の即時対応が良好な予後を促している。治療効果 (投薬率、障害者手当の受給率、再発率など) は対照群とのエビデンスによっても明らかにされている。

家事調停での背後仮説

現在日本で実施されている調停 (ここでは主に家事調停を論じていく) で主流となっているそこでの理論は、人間は個人的な利益を獲得することを主たる動機として行動するという考えに基礎をおいている。裏に潜んでいる共通利害を見つけることによって、現在の対立の解決を図る。この利害に基づいたアプローチ、問題解決アプローチであり、人びとの内的な欲求や利害の表出から生じたものであるという仮説に基づくものである。これは、個人主義に根差したもの、司法システムにおいて支配的なものであるともいえる。

調停におけるナラティブ・アプローチを人々がある対立関係の中で自分自身を見つめている視点を変化させるようなものとして位置付け、その可能性を探っていきたい。そこでは、私たちが誰で、他の人とどのように関わり、またどのように振る舞うのかを構築していく際に言語が果たす役割に着目する。対立ではなく、理解、敬意、共同の物語を基盤とする人間関係の発展を目指すものである。さらに、物語が事実を正確に伝えているかどうかよりも、その物語がどのような現実をつくりあげていることに機能しているかを重要視する。世界を何の媒介も経ずに把握した後に物語を通して描写することができるものとしてとらえるよりも、世界をつくりあげるものとして物語をみつめることに注意を向ける方が有益なのである。

外在化

調停での技法として、外在化する会話が重要な役割を果たしていく。近代社会の一般的な認知・前提である、出来事を個人の内部に求め続けるという論法を逆転したものである。外在化する会話は、関係の領域に注意を向ける。この技法は社会構成主義に基礎をおく認識論の実践として位置付けられる。次にその社会構成主義の諸原則を確認していく。

反本質主義

人間は人間の内側にある本質的な要素で規定されるのではなく、社会的な過程によって構築される生産物である。本質的な要素が生物学的なものであるか環境によるものであるかにかかわらず、人間の性質というものはこれまで考えられたよりはるかに流動的で安定を欠くものである。私たちの心理状態に固定的に組み込まれているといわれてきたものの多くは、周囲の社会的、文化的な世界で刷り込まれたものである。

この概念は個人の心理という前提を揺るがすものである。よって、人々の利害を生み出しているとされる個人の心理的な欲求という前提は信頼度が低くなる。これは人々の欲求の度合いが低くなるということを意味するのではない。社会構成主義の観点からみると、人々の欲求は本質的な（あるいは自然な）ものというよりは、社会的な常識や規範、会話を通して構築されたものであるということになる。したがって、異なった種類の会話によって、これらの欲求を見直すことができる可能性は十分にあるといえる。このような考え方は、欲求の充足は、充たされるべき欲求がそのままの形で充足される事を越えて、調停の目的を変化の方向へと導くものである。ある一つの文脈の中で、あるいはある一つの問題の取り上げ方のなかで切実に感じられた欲求が、異なる会話からの光を当てた考察を経て、劇的な変化も可能にする。

絶対的真理への反論

社会構成主義的視点は、客観的な事実というものの存在に疑問を投げかける。あらゆる知識はある視点から生成される。これらの視点とは、現実を見つめるある特定の文化的社会的な見解から生み出されたものである。この意味において、あらゆる知識は決定的なものとは言えず、それが生み出された時代や空間、社会的な状況に左右されるものである。どんなものであれ、何かについての真理を知るということは、その対象がどのように見えるかということに関わるとともに、どのようにその対象が出現するかという視点を理解することにも関わってくる。さらに、あらゆる事実というものは、それが確立し事実として認められるような特定の視点を優遇する過程を反映して、特定の利害に貢献するものであると考えることができる。

この原則は、調停者が当事者の語る物語をどのように聞くかということに密接な関係にある。調停という仕事は単に対立する物語から人々が事実を整理することでも、その人々の利害や欲求としての事実を確立することでもない。調停では、そこからそうした「事実」について確立される視点を脱構築し、そうした視点によって供給される利害を評定することなのである。その過程において、すべてのことが流動的になっていく。言い換えれば、調停において私たちは社会構成主義の視点から、事実について聞き、そこから当事者の利害を明確にするところに関心を示す必

要があるといえよう。同時にこれらの事実や利害がどのように生まれてきたかという、文化的社会的な過程に関心を持つものでもある。

言語の役割

ヴィトケンシュタインが主張するように、言葉とは単に私たちが出来事や現実を表現するために使う手段ではない。言葉が出来事を構築していくという認識が有効になってくる。私たちが思考する方法やその時に使う概念は、私たちが思考を始める以前に存在していた言語や言説が提供している。調停は意味を創り出す活動であるから、調停の場で生み出す物語が実際の体験を構築することになる。

さらに、言語を思考の前提条件とみなす考え方は、人々の物語を、そこに潜み、以前から存在する欲求としての表現される土台を掘り崩すことである。これによれば、調停での対立は、人々の経験を形成してきた言葉による構築物として聞くことになる。しかも私たちが使用する言葉は私たちが創り出したものではない。私たちが生まれてきた文化的な環境から継承してきたものである。従って、個人をその世界における主要な行動者とみなすことは困難にもなる。個人主義の視点に立つ問題解決モデルは、もはや価値判断から離れた中立的な視点として捉えることも困難になってくる。

現実社会的・言語的に構成される

人々が言語や言説によって形づくられるとすれば、人々の態度や認知力、動機といった内面的な心理状態や、あるいは社会構造というもののより、人と人における相互作用というものが考察の中心になる。このなかで、世界は構築されていくのだと考えることができる。話をするとき、人々は内面にあるものを表現するのみならず、外の世界を構築しているのである。

この時構築される世界は、個人の内側にある世界と、そのうえに社会構造が築かれる土台を含んでいる。このように、言語は「遂行的」なものであり、言語の使用は社会的行動に他ならない。このような考え方は、言語が思考や感情を表現し、行動を描写するための手段であるという考え方と相反する。そこから、調停の場とは、単にある人と人との間の問題が解消される場というよりは、ある種の社会的な恒常性が再構築される場であるといえよう。

ナラティブの視点から見た対立

社会構築主義からみれば、単一で定義可能な現実というのは存在しない。むしろ、私たちが人生において見出す意味は多様なものである。この意味の多様性によって、時に人々の間で対立が生じるのは避けられない。従って、ナラティブの視点からの対立は、多様性から生じる避けることのできない副産物であり、個人の欲求や利害の表現の結果とみなさない。

対立はどのような状況においても、人々がある視点から、ある文化的な位置から眺めるという視点からすると、人々は何が起きたかについての物語を発展させ、自分たちの生み出した物語の中にある社会的な場面で、その役割を演じ続けるのだといえる。この視点からすると、事実とは単に一般的に受け入れられている物語に他ならない。

自己の特性

調停者が自己というものの特性をどのように理解するかは、当事者間における対立にどのように取り組むかを左右する。従来の問題解決型の利害を基盤にしたアプローチは、個人を独立不変、単一で自発的であり自己統御性のあるものとして強調していた。このように個人を規定する見方は、対立の原因となるものを個人のなかに見出すことに重きをおくことになる。行動の責任は必ずその個人が負わなければならない、選択肢は個人のものであり他の誰のものではないとされる。

しかし、それに対してポストモダンの視点からすると、問題とは人の個人的な問題ではなく、人間関係の形式のなかで構築されていると考えられる。さらに、社会的文脈が個人やアイデンティティを理解するための鍵となる。自己はその人の社会や文化における様々な要素からつくりだされ、それらは相互作用の中で展開される。個人は社会的実践の場で形成され、他の人々との毎日の関わりあいの中に存在する支配的な規範や文脈、あるいは文化の影響を常に受けるものとしてみなされる。

調停の場というものを、参加者が異なった文脈の位置づけに光を当てながら、対立の過程の解釈を再構築する場と考えることができる。

脱構築と物語の再構成

これまでに構築された支配的な社会的文化規範にさらされた結果、私たちが当然と考えるに至った思い込みを、解きほぐしていくことが可能という考えが脱構築とされる。調停が成功するかどうかは、調停者がいかに上手に現実や事実を対立の物語から切り離すことができるかどうかではなく、当事者が「代わりの物語（オルタナティブ・ストーリー）」を生み出すことができるように、調停者がいかに支援できるかに係っているといえよう。

参考文献

- ジョン・ウインズレイド ジェラルド・モンク 国重浩一他訳『ナラティブ・メディエーション—調停・仲裁・対立解決への新しいアプローチ』北大路書房 2010
- ケネス・ガーゲン 東村知子訳『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版 2004
- 野口祐二『物語としてのケア』医学書院 2002
- 大澤恒夫『法的対話論』信山社 2004
- 浦河べてるの家『べてるの家の「当事者研究」』医学書院 2005
- 斉藤環訳著『オープンダイアログとは何か』医学書院 2015